

発行：(福) 十字の園本部事務局
理事長 平井 章

住所：〒431-1304
静岡県引佐郡細江町中川 7220-11
tel 053-436-9535
fax 053-437-1352

社会福祉法人 十字の園

ぶどうの木

(ヨハネ福音書 15章)



❖ 安心できる老後をみんなで♪よく考えよう♪ ❖

アドナイ館 施設長 宮岸 孝一



現在の介護保険制度の動向を、自分の目で・耳でよく検証し確認しておかなければ高齢者の皆さんは勿論のこと、これから老後を迎えようとしている皆さんにも重大な影響がまさに起きようとしている。いや、起こされようとしているのをご存知ですか。この夏に行われた参議院選挙の最中に、要支援や介護度1の方たちを介護保険制度から切り離し、デイサービスやホームヘルパーの利用対象から外すことが検討されていたのです。「我国も、ドイツと同じように財政事情が厳しくなって、介護度の低い高齢者の面倒は見れない。要支援・介護度1の高齢者は介護保険が使えなくなると言っているのです。」と同時に、特別養護老人ホーム利用にも影響が出てくることを示唆しています。これから老後を迎える人や介護の必要な高齢者を抱えている家族等への負担が一段と重くなるのに時間はそうかからないかもしれません。

実はケアハウスも、今後はどうなるのか介護保険を見つめて岐路に立たされています。介護保険制度を利用されている高齢者がケアハウス内にもおられます。また、そうした高齢者が年々増加し「特定入所者生活介護」の指定を受けて新たな事業展開を始めた施設もあります。しかし、要支援・介護度1の方たちが介護保険から外されれば、施設の運営に重大な影響が出てきます。今後の生き残り作戦は国民一人ひとりの問題でもあるのです。

『夕暮れになっても光がある』

～紅い石の碑のこと「その光を浴びて～」

理事長 平井 章



十字の園の法人の理念は、『夕暮れになっても光がある』（ゼカリヤ書 14：7）です。浜松十字の園の正門の左側に、この聖句の書かれた紅い石の碑があります。この碑のいわれについて、記念誌に綿鍋義典 2 代目理事長が次のように記しています。

紅い碑のこと「その光を浴びて」

問 あの碑はいつ出来たのですか？
答 昭和 59 年の春だ。十字の園の建物を全面改築して、それが完成した時に作った。

問 あれを作った理由は？
答 全面改築工事で古い建物を全部壊した。以前の建物は、白い壁、日本瓦の建物は緑の松林に良く映えて、簡素ですっきりした美しい建物だった。その建物全体を記念するために、この碑を作ったんだ。

問 その建物が日本最初の特養だった訳ですね？
答 そう。この建物を作るために、ハニ姉妹がドイツ国内を駆け巡って募金活動をしてくださったんだ。そして祈って協力して下さった。この建物をよりどころにして、我々の先輩たちは、未知の事業に挑戦したんだ。

問 古い建物の時代にも、大勢のお年寄りがご利用なさったんでしょうね？

答 思い出の深い人たちが大勢いるなぁ。逆境にありながらも喜びつつ、感謝しつつ、やがて終りの時を見事に迎えて、天に帰っていかれた人たち。忘れられない、感動的な思い出がいっぱいある。

問 そういう思いをみんなこめて、『夕暮れ……』の碑を作った、という訳ですね？

答 この写真をドイツのハニ姉妹に送ったところとても喜んで下さった。碑を喜んだ訳じゃない。『夕暮れになっても光がある』の聖書の言葉に、十字の園がしっかり立っていかうという姿勢を喜んで下さった。

問 この旧約聖書の言葉は、十字の園にふさわしい聖句ですね。お年寄りに、慰めと希望を与えてくれる……。

答 私たち自身が、その光を浴びて、その光の中で感謝し、希望に燃えて、はつらつと生

活していないとね。人生の夕暮れを迎えるという現実、若い人には想像もできないような、とても重い事柄だと思うんだよ。
問 本当にそうでしょうね……。私たち自身の生き方と仕事を通じて、お年寄りに「光があること」を伝えていかなければなりませんね？

答 ハニ姉妹がある機関誌に、十字の園は「伝道と奉仕の団体」と書いているんだ。我々は、老人福祉施設だから、入居者の日常生活に、行き届いたお世話ができればそれで満点だと思っているが、ハニ姉妹の言葉は違うね。キリスト教社会福祉は、本来そうあるべきなんだろうがねえ。「伝道」という面で、我々にためらいがある。遠慮しているのか、自信がないのか。

問 ところで『夕暮れ……』の聖句を選んだのは誰ですか？

答 それが分からない。誰に聞いても、知らないと言うんだ。こういうのは失礼なんだが、初代理事長の鈴木生二さんが、聖書をあちこち開いて偶然見つけたんじゃないだろうか、と想像している人が多い。

問 あの書は誰の字ですか？
答 書は鈴木生二さんだ。病気になる少し前に書いてもらったんだから、結果として、あれが絶筆みたいなものだなあ。



これまでも、これからも

十字の園を見学された方が、「人生の夕暮れになっても、生きる意味を創造していく姿勢に、なんと深い慰めと生きる希望を与えてくれる言葉ではないでしょうか。」と記されていました。

時が流れ、たとえ法律や制度が変わったとしても、これまでも、これからも、十字の園は、『夕暮れになっても光がある』の聖句を理念に掲げて、利用者お一人ひとりに、慰めと希望を与える「光」があることを伝えていきたいと思えます。

「2人が心を1つにして求めるなら」



社会福祉法人 十字の園 理事
(聖隷福祉事業団 元会長) 長谷川 カ



聖隷の創業者 長谷川保が最も多く私に語った聖書の言葉を思い出してみました。

「この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じて、そのとおりになる。あなたがたにできないことはなにもない。」(マタイ 17-20)、
「2人が地上で心を1つにして求めるなら、私の天の父はそれをかなえてくださる。」(マタイ 18-19)

私は1961年から約30年間、1994年に長谷川保が天に召されるまで誰よりも多く保と接することを許されてきたように思います。1960年は十字の園が建設された年ですし、遠州栄光教会三方原会堂が献堂された年です。また聖隷病院はようやく結核対策が峠を越して、新しい医療福祉対策に大転進すべき時を迎えておりました。理事会の激しい議論と大紛糾の末に、長谷川保は「君たちは三方原を守っておれ、おれは住吉へ行って浜松病院を創る。」といて住吉へ居を移してしまいました。この直前まで、わたしは給食部の仕事をしていましたが、住吉へ来いといわれて浜松病院創設の仕事にかかわることになりました。

それまでもそうでありましたが、長谷川保が考えて取り組む仕事はいつも資金があって計画するものではありませんでした。「涙を流している人たちがいる。生活に困難している人たちがいる。」ということが計画と実践の理由でした。長谷川保のもとで仕事した20年間は余裕があった時はありませんでした。1960年以降の聖隷の事業展開を年表で見ただけで理解していただけないと思います。そんな時代に、冒頭の聖句が真剣に語られたのです。あらためてこの聖句を読む時に、「本当にこれを信じ得る人がどれだけいるだろうか。本当に信じ得るためには、どれほど厳しく忠実な信仰に生きていなければならないか。」と思わせられるのです。

ヒマラヤ杉との語らい



法人本部 企画研修室長

森 茂廣

去る10月21日の朝、台風23号通過直後のできごとである。わかば保育園跡地に残されていた高さ15m位、幹の直径が80cm以上もあるヒマラヤ杉の大木がいきなり横倒しになっているのを目にした。おそらく、降り続いた雨で地盤が緩んでいて、台風の強風に耐えられなかったのだろう。幹は太く見あげるほどに真っ直ぐそびえ、四方に大きく手を広げるように枝を伸ばし、まるでグラウンドの守り神のようにどっしりと頼もしい存在であっただけに、こんなにあっけなく倒れてしまった姿を見て、驚くと同時に胸が痛んだ。樹の救命について、専門家に相談してみたが、残念ながら伐採することになった。立派に成長した樹の尊厳を思い、どのように活かせばいいか悩んだ末、ベンチとして活用することになった。新しい十字の園の計画が進展するまでの間、「ふれあい公園」のシンボルとして入居者の皆さま、地域の皆様に親しんでいただきたい…との願いを込めて。

樹というものは神秘的で、静けさのうちに生きたあかしを年輪に刻んでいる。数えて見ると樹齢43年位であることが推測できた。その経緯をわかば保育園に伺ったところ、38年前、園舎が建てられたとき、桜やクスノキと一緒に植えられたそうである。子供たちに、木蔭を提供し、風のささやきを告げ、その成長を見守ってきた樹である。43年前、開設された浜松十字の園にとってこの樹は、近所で共に歩んできた幼な友達のような親近感のある存在である。40数年生きてきたこの樹には不思議なぬくもりが感じられる。この樹に腰掛け、十字の園の歩みについて想いを馳せると、ここで生活された入居者の皆様、それを支えてきた諸先輩たちのことが偲ばれる。～「夕暮れになっても光がある」～一人ひとりの人生を大切に思う心で綴られた尊い歴史である。しっかりと受け継いでいきたい。



2004年度 十字の園大会 (御殿場：時之栖) / 11月11～12日

御殿場十字の園がホスト施設となった今年度の十字の園大会は、施設より南10kmほどの「御殿場高原ビール・時之栖」にある研修施設・ブルーベリーロッジにて開催しました。法人の各施設から80余名が参加して、福祉の原点やユニットケアなどに深い学びと熱い討議を展開、十字の園の精神をあらためて学び感じ取ることのできた2日間でした。



大会は、御殿場教会の中島善子牧師による礼拝ではじまり、「十字の園における福祉の創造 ～既に据えられている土台の上に～」を主題に今年度の大会は展開されました。

第1日目は、岡本明夫・元御殿場教会牧師による基調講演の後、各施設から集まった職員全員により、施設介護における『サービス基準指針』をテーマに合同の研修会が行われました。

第2日目は、課題講演にユニットケアの創始者の1人である武田和典氏を講師を招き、ビデオ映像やスライドをまじえて介護の求める取り組みをわかりやすく講話して頂きました。

基調講演 「土台をたしかめよう」 講師：岡本 明夫 氏 (元御殿場教会牧師)



講師が、御殿場教会の牧師として活躍されていた1967年に、御殿場教会を中心とする御殿場十字の園設立のスタートがありました。

基調講演では、初代理事長・鈴木生二氏との出会いの中から御殿場の地に特別養護老人ホームを建てる取り組みが始まり、教会の中では、福祉事業に対し、国や自治体に任せるべきとする論争が起きた当時の様子が講話されました。福祉施設建設に関わった当時の御殿場教会の皆様の迷いと大きな決断の中で、教会が中心になって動き出した老人ホーム建設の流れは、教会が一丸となって設立準備に立ち上がる募金運動と奉仕の様子など、当時の方々のご苦勞が伝わってきました。

また、講師からは、御殿場十字の園が聖句とする『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい』の言葉が示す、聖書に体あたりしていく時に本当の「福祉の心」が生まれてくることを、職員一人ひとりが確かめながら進んでもらいたいとの言葉がありました。

基調講演を聴いた職員からは、講師が教会の役割について『精神(キリスト教)の継承は確実になされているなど感じた歳月が過ぎた今、これからの世代の職員に精神が受け継がれていくことを考えると……』と、問われる言葉をとても印象深く聞くことができたとの感想が届けられています。そして、十字の園大会が開会礼拝で始まり閉会礼拝で閉められる行程についても、今後も永遠に続けてほしいことであり、全ての十字の園の施設においても十字の園らしく礼拝を大切にしていきたい、との感想をいただいております。

課題講演 「私たちが望む暮らしは」 講師：武田 和典 氏 ～ユニットケアで大切にしたいこと、考えたいこと…～ 「きのご老人保健施設」副施設長 「特養・老健・医療施設ユニットケア研究会」代表

講師は、2つの知的障害者施設の開設に関わった後、特養などの施設長として開設と運営に関わり、「施設は誰のものか」を原点にこだわり、宅老所等に学びながら利用者の方々から必要とされる施設のあり方と姿を職員と共に創ってこられました。

その一連の取り組みを「ユニットケア」として、「必要なところで、必要なものを、必要なだけ」の原則を貫く現場の実践を、「その人らしさが入り口、出口は地域」として、《見るケアから関わるケアへ、そしてつながるケアへ》その進化と深化を作り出そうと呼びかけています。



十字の園大会に参加した職員からの声

岡本明夫氏の『基調講演』を聴いて

今年度は御殿場で開催されたということもあり、基調講演では元御殿場教会の岡本牧師から御殿場十字の園設立時のお話を聞くことができました。『教会は他のための存在である時にはじめて教会である』という言葉が印象的で、老人ホームを建てることはとても大変なことです、目の前に困っている人がいるからその人を助けたい、その思いから教会が中心となり十字の園の設立がスタートしたそうです。

既に建てられた施設で働く私たちは、そのような歴史の上に施設があることをいつも意識して仕事に向かわなければならないと感じました。また、このお話を聞き礼拝の大切さを考えるきっかけにもなりました。今後、設立の精神を受け継いでいくためにも、理念を理解していくためにも、毎朝の礼拝に参加し、十字の園の職員としてどういう気持ちで利用者の方と接していくべきか理解を深めていきたいと思えます。(斉)

武田和典氏の『課題講演』を聴いて

ユニットケアの創始者の1人である講師から「私たちが望む暮らしは」をテーマに講演を聴きました。施設の基本(土台)が理念(精神)であるようにユニットケアの基本とは「あなたは自分の働いている施設を利用しますか?」と考えることです。自分たちが利用したいと思う施設にするにはどうすれば良いのでしょうか?

ユニットケアとは、大きな集団ケアでなく、小さな集まり(ユニット)で、お年寄りの顔がよく見えるきめ細かいケアを目指すものです。基本は「必要な人から、必要なところで、必要なものを、必要なだけ」です。この実践を通して「ケアが変わる、生活が変わる」中で「組織が変わる、施設が変わる」。

精神(理念)は変わらず伝承されていくものだが、形(施設)はその人、その時代に必要のように生まれかわるものです。十字の園ができて後から制度が

できたように…。

ユニットケアでは今までの流れ作業的な業務に駆け回るケアを変え、お年寄りのそばにいて、その声を聴き、生活を支えることで、願いや希望を叶えていくことを目指しています。

大きな施設を小さくするのは、家庭的ケアを目指し一人ひとりにより深く関わりたいからです。大切にしたいのは、その人が納得して楽しんで過ごす生活、その人らしい生活です。

はたして私たちの施設はどうでしょうか?ハード面を小さく区切ることに終始していませんか?主人公のお年寄りはどう感じていますか?「ユニットケアをしている」と胸を張って言えるのでしょうか?「ユニットケアとはなにか?主体はお年寄りになっていますか?」あらためて考えさせられる講演でした。(小)

テーマ研修「サービス基準指針」に参加して

サービス基準指針とは、施設の理念をサービス提供職員までわかりやすく噛み砕き『どの職員がサービスを提供しても同じサービスの提供が行われるように、サービスの質の一定化を図る』ために必要なもの、と理解のもと、各施設の職員とまた施設毎に

- ① 指針とはなにか、どう理解しているか。
- ② なんのために指針が必要か。
- ③ どうすれば具現化できるのか。

について話し合いを行い、取り組み、理解、浸透の状況などについて意見を交換しました。

理念というゆるぎない土台の上に、その時代、場合によって変化する利用者のニーズを、指針を通してどのようにして解決していくかが、我々福祉の現場で働く職員の使命として再認識しました。(博)

アンケート調査では、ほぼ全員の理解が得られていると判断されるサービス基準指針ですが、それをどのように体現していくかが重要です。皆で読み合わせをして、内容の確認を何度も行い、いるもの、いないものを、自分たちで認識する必要があります。また、担当する部門の指針だけでなく、他部門の基準や指針も理解していなければ、施設としての方向性がわからなくなります。

では、読み合わせをいつ?どこで?誰と?行い、そこで発生した意見や疑問をいつ、どうやって解決していくか。決めなければならないことが沢山見えてきました。

他人から言われて作るのではなく、自分たちで作ることが重要だと思います。(章)

各施設のトピクス



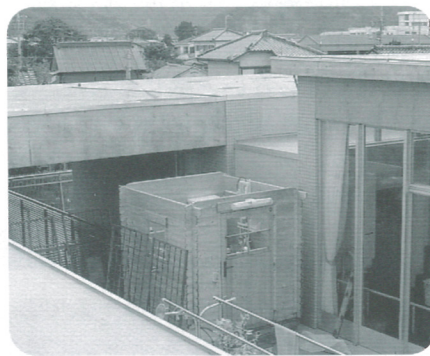
台風直撃！



松崎十字の園 山本 隆弘

今年は大雨・台風・地震と異常気象が続く1年でした。事件は私が日直をしていた10月9日に発生しました。台風22号が近づいている報道はされていましたが、「本当に台風は来るのかね？」と話題に上がるほど小雨交じりの平穏な午前中でした。しかし、昼過ぎから状況は一変。突風が吹き荒れ、昨年設置したログハウス調の洗濯物置場は屋根が飛ばされ（写真参照）、運悪くそれが職員の車へ直撃。フレームは歪み、ガラスは割れ、かなりの重傷。

被害はそれに留まらず、納涼祭の飾りや出店の器具・修理予定の介護器具などが入っていた2つの倉庫も吹き飛ばされ、中に入っていた物は海へ流され、倉庫も200mほど離れた橋に無残な姿で掛かっており、クレーンを使っての大掛かりな撤去作業になりました。予想外の痛い出費でしたが、人的被害がなかったことは不幸中の幸いでした。他施設では被災された方々がおられ、新潟での出来事も他人事には思えません。心よりお見舞い申し上げます。



ホームヘルパー養成研修 終了

御殿場十字の園 加藤とも江



9月1日からスタートした2級ホームヘルパー養成研修。多数の応募から選考された24名の受講者は、講義や演習・実習など長い学習期間を送り、11月25日、無事全ての日程を終え、閉校式を迎えた。

興味を抱いた講義も多くあったようで、演習では車椅子に乗ったり、階段の乗り降りをしたりと利用者の視点に立つ体験が行われ、「おむつ体験」ではおむつに排尿することの難しさや恥ずかしさを体験し、利用者の気持ちに近づくことができたと思う。

講師は外部だけでなく施設長始め職員の協力の中で行われた。日頃、利用者の介護をしているプロの介護士たちの、生きた言葉は、受講生の心を大いに動かし、介護の大切さを学んでくれたことと思う。職員も日頃の介護を再確認し、さらに自信と意欲に磨きがかかることを期待したい。中間アンケート調査では、83%の受講生が、この資格を生かした仕事に就きたいと希望している。今後の高齢者支援の担い手に、活躍が期待される。

サザエさん家(ち)ができました



浜松十字の園 小澤 博和

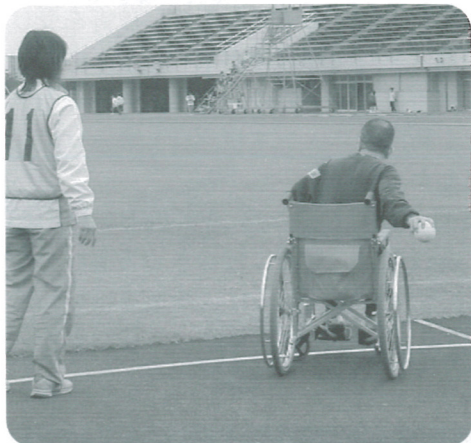
前回『ぶどうの木』でデイセンター「母の家」のことが載っていました。施設のお年寄りやデイサービスを利用されている方々が、のんびりと民家で1日を過ごすというものです。どこかのお宅に遊びに行った感じが、施設のお年寄りに好評のようです。

このように施設を利用されておられる方が、「母の家」の他にももっと出て行く場所がないかと探していたところ、浜松十字の園から200mぐらい、歩いて3分の所に、職員の寮だったところが空くことになりました。早速改修を行い、築ウン十年とは思えない、なかなかステキな家になりました。

外観は「サザエさんの家」のようで、♪お魚くわえたドラ猫、追っかけて…♪と口ずさんでしまいそうな、なんとも懐かしい雰囲気です。9月から利用を始めました。ご飯を炊いたり、ホットケーキを焼いたりして、普段は怒りっぽい方や徘徊していた方が、落ち着いて楽しく過ごしております。まだまだ始まったばかりですが、将来は近所のお年寄りや子供たちが気軽に遊びに来れる場所になったらいいと思います。



わかふじスポーツ大会に出場しました オリブ 石田 良



9月19日早朝、雲行きの怪しい中、ご家族も含めた計9名で松崎より草薙陸上競技場へ向け出発しました。わかふじスポーツ大会参加は今年で3回目。開設当初から2名だった参加者も、今年は4名に増え、オリブのスポーツへの関心も高まってきました。

大会前日まで暑い中、競技の練習に励み「今年も金メダル！初めてだけ金メダル！」を目標に頑張りました。アテネオリンピックの勢いに負けず劣らずいい汗を流されておりました。

結果は悔しい悔しい2位の方、今年もやっぱり金メダル！の方、鼻高々、初出場金メダル！の方など様々。

しかし、結果ではなく練習で共に流した汗はなににも変えることのできないすばらしいものであり、大会での表情は普段の生活では見ることのできない、活気溢れる生き生きしたものでした。外出をすることで、心身ともにリフレッシュできたと思いますし、利用者との関係も、練習・当日を通してまた一步深いものになったと感じています。

温泉一泊旅行…



伊豆高原 十字の園 小川 秀幸

最近巷では癒しブームとやらで、温泉旅行番組もTVで数多く放送されています。利用者からも「行きたい、連れてって。」という声があちこちから聞こえ、「行ってみたいアンケート」を取ると『温泉』という文字が大半を占めていました。「大温泉地の伊豆に住んでいながらささやかな夢の1つも叶えてあげられないのか…。それなら一丁やってみますか！」ってなわけである7月に温泉一泊旅行を行いました。場所は近過ぎず遠過ぎずということで湯河原温泉に決定。

利用者3名、介助職員3名の計6名、全員男のなんとも色気のないメンバーで、緊張の面持ちのちいざツアーに出発！

宿では、温泉を楽しむ者、お酒を楽しむ者、麻雀を楽しむ者、各々違った形でのんびりと楽しいひと時を過ごされました。翌日も天候に恵まれ、芦ノ湖で遊覧船に乗り、名物を食べ、土産を買って施設に帰りました。

疲れてグッタリしている職員とは対照的に、嬉しそうに土産話をしている利用者の姿は印象的で「行ってよかった、行ってよかった」と実感。今度はどこに行こうかな～なんて考える毎日です。



職員七変化

アドナイ館 三輪真理子

アドナイ館敬老行事「希望の日」でのアトラクションの1コマ。ものまねカラオケという出し物で、サービス職員が寸劇をしながら、歌を歌うものでした。

最初は、裸の大将放浪記で「野に咲く花のように」。どれが本物の山下清でしょう??

2番目は、金八先生で「贈る言葉」。不良女子学生もすっかり更生。人間はミカンじゃな～い!

3番目は、ドリフターズで「いい湯だな」。あれっ、4人? 長さんも天国から特別参加。

最後は、キャンディーズの「年下の男の子」。フリはバッチリ! でも、たくましさぎ～!

笑って笑って、おなかが痛くなる人が続出。楽しい楽しい午後のひと時でした。



台風 22 号被災者に義援金集まる

2004 年 10 月 9 日の台風 22 号では、直撃を受けた静岡県伊豆半島の十字の園施設でも大きな被害を受けました。松崎十字の園では、施設報告にあるように物置小屋の屋根が飛ばされたり倉庫が壊れるなどの被害を被りました。一方、伊豆高原十字の園では、施設建物への直接的な被害はないものの、周辺で大木が倒れたり長時間の停電に見舞われたり、慌ただしい状況でした。その中でも新聞やニュース報道にもあった伊東市宇佐美地区では、家屋の崩壊や災害で負傷者を被った職員がおりました。

そこで、十字の園では、伊豆高原十字の園と協力し各施設に義援を呼び掛けたところ、短期間に 204,120 円の温かい支援が集まりました。各施設の職員や関係者から集まった義援金は、早速に皆様からの温かいところとあわせて 10 名の被災された職員の方に届けられました。義援を受けた職員からは、支援を頂いた皆様方に深い感謝とお礼の言葉がありましたことをご報告致します。(伊豆高原)

公的補助事業の報告

このたび、日本自転車振興会の助成金の交付を受け、送迎支援車(日産キャラバン)を購入しました。伊豆高原十字の園ショートステイ利用者の送迎に使わせていただいております。日本自転車振興会をはじめ、ご協力を賜りました関係者の皆様に謹んで感謝の意を表します。

さてこの車、車イスが3台乗車できます。それにこのデザイン、自転車が走っていてなんとも速そうではありませんか? いつもは気になっていた桜並木のデコボコも快適に走ります。御利用の方からは「今度の車イイネェ～」と喜びの声が聞こえてきます。



法人研修委員会報告

法人研修委員会では、十字の園大会をはじめ、法人内での各部署ごとの研修会、リーダーおよび管理職対象の研修会など、様々な研修を企画、実行しております。

今年は、外部講師をお迎えしての研修も行いました。

6 月には、人事・労務コンサルタントの白川義則氏を迎え、「響きあう組織をめざして」をテーマに管理者研修を行いました。現在の施設の立地環境、職員の特質など、施設を取り巻くすべての環境を分析、将来を見据えての施設、職員の向かう方向性を考えさせられました。

7 月には、生活介護研究所の坂本宗久氏を迎え「元気の出るリーダーのための講座」を開催し、組織のあり方や、人材の育成、指導などの視点から「元気の出る」現場を作る方法を学びました。法人研修委員会では、職員の質とサービスの質の向上を図るため、今後もこのような機会を設け、共に学び、考え、歩んでいきたいと考えます。(法人)

〈あとがき〉 表紙の写真より

アドナイ館の庭の柿の木に、たわわになった実で干し柿をつくりました。今年は全員に配るほど豊作で、みんなでおいしくいただきました。でも、高すぎて採ることができないものがあと 150 個ほど残っていて、みんなであらめしように首が痛くなるほど上を眺めています。

〈一番下は旅人のために。真中は自分たちのために。一番上は空を飛ぶ鳥たちのために。〉

いつかどこかで聞いたことがあるような、ないような…。

緑豊かなアドナイ館の森は、私たちを楽しませてくれるだけではなく、様々な生命を養ってくれているのですね。(輪)

皆様の暖かい御支援をお待ちしております!!

〒431-1304 静岡県引佐郡細江町中川 7220-11

社会福祉法人 十字の園

理事長 平井章

銀行振替 静岡銀行細江支店 普通 0015345